

【個人研究】

## 親世代の障害者に対する意識

藤田 雅子\*

### Parents' Opinions of the Disabled

Masako Fujita

Parents having school age children were asked to answer the questionnaire to find the opinions to the disabled. Their son or daughter belong to one elementary school or two junior high schools. The available answers were five hundred and twenty.

Almost all of them have the chance of meeting the disabled in the town or on the street. One fifth has visited the institution for the disabled. One fourth has the disabled acquaintances or friends. For them the disabled are familiar. First of all they think that the disabled are hard, then sympathize with the disabled person, but they do not think that the disabled are special.

Over half of them could write their ideas for integrating the disabled into our society. Anticipation to welfare society, education of integrating the disabled children into the ordinary class or interexchange between the abled and the disabled, human ties, volunteer activities, regards to the disabled person's opinions, structural improvement of the town for going out, these ideas are very effective to create coexistence-society even though some steps are necessary to realize these ideas. Parents having these creative thinking have good effects on their children for accepting the disabled.

#### 1. 目 的

福祉社会の構築にとって、障害者に対する意識のノーマライゼーションは、不可欠である。障害者理解が社会に根づくには、社会意識総体の成熟が前提となるが、昨年度は次代の担い手である子ども世代の小中学生を対象にした。今年度は、その次代を担う子供を育てる親世代にターゲットを当てた。親が子ども

にも与える影響は大きいからである。

#### 2. 方 法

小中学生のいる親が調査の対象である。『日ごろ考えること』という障害者および障害者を取り囲む環境に対する気持ち、態度、考えなどを意識化して回答してもらう。大半が「はい」、「いいえ」、「どちらでもない」など選択肢を選択する方法であるが、一部記述式が含まれている。

質問内容は表1の結果に示される。順序な

\* ふじた まさこ 文教大学人間科学部人間学専修

親世代の障害者に対する意識

どは質問紙とほぼ同様である。間接的経験、接触経験、直接的な関わり、障害者に対する気持ちや感情、障害者を取り囲む教育や福祉といった環境への態度、障害者関係の職業への考え、障害児のいる親への態度などから構成されている。記述式は、障害者の社会的統合を促進するための考え方を書いてもらう。

協力が得られたのは、横浜市内の中学校2校と小学校1校の合計3校である。

対象となる小中学生の親への質問紙実施方法であるが、学校教育の場であるという制限から、小中学生を通して親に渡してもらい、

家で親がアンケートに記入したものを子どもが学校に持参し、アンケートボックスに入れるかまたは担任が回収するというやり方を取った。小学生と中学生をもつ母親520名からの回答である。

年齢構成は、30代前半が8名（構成比1.5%）、30代後半が114名（21.9%）、40代前半が254名（48.8%）、40代後半が135名（26.0%）、50代前半が9名（1.7%）である。40代前半が全体の約半分を占め、これを頂点に正規分布に近い年齢構成になっている。年齢の範囲は、30歳から53歳までである。

表1 障害者に対する意識

数字は人数（ ）内は%

1. ヘレン・ケラーの名前を聞いたことがある	515名 (99.0%)
① ヘレン・ケラーの伝記を読んだ	402 (77.3)
② テレビや映画で見たことがある	406 (78.1)
③ ヘレン・ケラーに同情する	307 (59.0)
④ ヘレン・ケラーの努力に感銘する	459 (88.3)
⑤ ヘレン・ケラーについて子どもに話したり、本を読んであげる	131 (25.2)
⑥	42 (8.1)
⑦	276 (53.1)
2. 野口英世の名前を聞いたことがある	473名 (91.0%)
① 野口英世の伝記を読んだ	429 (82.5)
② テレビや映画で見たことがある	368 (70.8)
③ 野口英世に同情する	286 (55.0)
④ 野口英世の努力に感銘する	437 (84.0)
⑤ 野口英世について子どもに話したり、本を読んであげる	298 (57.3)
3. 目の不自由な人に会ったことがある	475名 (91.3%)
① 町を歩いているときに見かける	469 (90.2)
② 電車やバスで見かける	383 (73.7)
③ 盲学校を訪問したことがある	42 (8.1)
④ 目の不自由な人の施設を訪問したことがある	24 (4.6)
⑤ 目の不自由な知人がいる	63 (12.1)
4. 障害をもつ人への気持ち	
① 目の不自由な人に同情する	391名 (75.2%)
② 目の不自由な人は暮らしにくいと思う	463 (89.0)
③ 目の不自由な人は特別な人だと思う	81 (15.6)
④ 子どもの学級で目の不自由な子が教育を受けることに賛成する	298 (57.3)
⑤	155 (29.8)
5. 耳の不自由な人に会ったことがある	343名 (66.0%)
① 町を歩いているときに見かける	252 (48.5)
② 電車やバスで見かける	279 (53.7)
③ 聾学校を訪問したことがある	29 (5.6)

- ④ 耳の不自由な人の施設を訪問したことがある 20 (3.8)
- ⑤ 耳の不自由な知人がいる 121 (23.3)

6. 障害をもつ人への気持ち

- ① 耳の不自由な人に同情する 382名 (73.5%) どちらでもない 88 (16.9)
- ② 耳の不自由な人は暮らしにくいと思う 436 (83.8) どちらでもない 42 (8.1)
- ③ 耳の不自由な人は特別な人だと思う 72 (13.8) どちらでもない 110 (21.2)
- ④ 子どもの学級で耳の不自由な子が教育を受けることに賛成する 289 (55.6)  
どちらともいえない 166 (31.9)

7. 手足が不自由な人に会ったことがある 471名 (90.6%)

- ① 町を歩いているときに見かける 474 (91.2)
- ② 電車やバスで見かける 360 (69.2)
- ③ 手足が不自由な子の学校(養護学校)を訪問したことがある 77 (14.8)
- ④ 手足が不自由な人の施設を訪問したことがある 117 (22.5)
- ⑤ 手足が不自由な知人がいる 141 (27.1)

8. 障害をもつ人への気持ち

- ① 手足が不自由な人に同情する 402名 (77.3%) どちらでもない 80 (15.4)
- ② 手足が不自由な人は暮らしにくいと思う 456 (87.7) どちらでもない 32 (6.2)
- ③ 手足が不自由な人は特別な人だと思う 90 (17.3) どちらでもない 108 (20.8)
- ④ 子どもの学級で手足の不自由な子が教育を受けることに賛成する 345 (66.3)  
どちらでもない 133 (25.6)

9. 知恵遅れの人に会ったことがある 483名 (92.9%)

- ① 町を歩いているときに見かける 463 (89.0)
- ② 電車やバスで見かける 431 (82.9)
- ③ 子どもの学校に障害児学級がある 202 (38.8) わからない 27 (5.2)
- ④ 知恵遅れの子の学校(養護学校)を訪問したことがある 69 (13.3)
- ⑤ 知恵遅れの人の施設を訪問したことがある 103 (19.8)
- ⑥ 知恵遅れの知人がいる 151 (29.0)

10. 障害をもつ人への気持ち

- ① 知恵遅れの人に同情する 354名 (68.1%) どちらでもない 121 (23.3)
- ② 知恵遅れの人は暮らしにくいと思う 384 (73.8) どちらでもない 88 (16.9)
- ③ 知恵遅れの人は特別な人だと思う 118 (22.7) どちらでもない 116 (22.3)
- ④ 子どもの学級で知恵遅れの子が教育を受けることに賛成する 251 (48.3)  
どちらでもない 180 (34.6)

11. 目の不自由な白い杖をついた人が、迷子になっていたら

- ① 「どうしましたか」と声をかける 451名 (86.7%)
- ② 周囲に「助けてあげて」と知らせる 345 (66.3)
- ③ 自分ではなにもできないと思う 36 (6.9)
- ④ 手伝う方法を知っておきたい 435 (83.7)
- ⑤ 自分とは、あんまり関係がないと思う 8 (1.5)

12. 車椅子の人が、建物の前にある3段の階段のところで、動けないときに

- ① 「どうしましたか」と声をかける 468名 (90.0%)
- ② 周囲に「助けてあげて」と知らせる 398 (76.5)

- ③ 自分ではなにもできないと思う 39 (7.5)
- ④ 手伝う方法を知っておきたい 413 (79.4)
- ⑤ 自分とは、あんまり関係がないと思う 11 (2.1)

13. 障害のある人が電車やバスを使うことを思い浮かべて

- ① シルバーシートを知っている 516名 (99.2%)
- ② シルバーシートは必要だと思う 403 (77.5)
- ③ 目や体の不自由な人に席をゆずる 501 (96.3)
- ④ 駅などの点字ブロックを知っている 436 (83.8)
- ⑤ 点字ブロックは必要だと思う 460 (88.5)

14. 障害のある人と知り合いになる機会

- ① 知人に、障害のある人がいる 242名 (46.5%)
- ② 親戚に障害のある人や子どもがいる 121 (23.3)
- ③ 自分に障害のある子がいる 12 (2.3)
- ④ 子どもが、障害児の学校へ行ったことがある 92 (17.7) 行ったかどうかわからない 39 (7.5)
- ⑤ 子どもの学校へ、障害児の学校から来たことがある 126 (24.2)  
来たかどうかわからない 138 (26.5)
- ⑥ 子どもが、障害児の施設に行ったことがある 173 (33.3) 行ったかどうかわからない 30 (5.8)

15. ボランティアという言葉聞いたことがある 455名 (87.5%)

- ① 人のためになることだと思う 460 (88.5) わからない 36 (6.9)
- ② ボランティアは賞賛されていいと思う 336 (64.6) わからない 118 (22.7)
- ③ ボランティアは楽しいと思う 152 (29.2) わからない 219 (42.1)
- ④ ボランティアは誰にでもできると思う 308 (59.2) わからない 77 (14.8)
- ⑤ ボランティアをしたことがある 143 (27.5)
- ⑥ ボランティアを試してみたい 203 (39.0) わからない 182 (35.0)
- ⑦ ボランティアは手伝いと同じだと思う 153 (29.4) わからない 102 (19.6)
- ⑧ ボランティアより仕事を優先させたい 145 (27.9) わからない 190 (36.5)
- ⑨ ボランティアより趣味を優先させたい 74 (14.2) わからない 214 (41.2)
- ⑩ 家族でボランティアをしている人がいる 42 (8.1)
- ⑪ 子どもがボランティアをするのに賛成する 421 (81.0) わからない 46 (8.8)

16. 目や、耳や、手足や、知能に障害のある子どもが生まれたら

- ① 障害のある子どもが生まれたら、悲しむ 475名 (91.3%) わからない 40 (7.7)
- ② 兄弟姉妹の中で一番かわいがらる 156 (30.0) わからない 221 (42.5)
- ③ その子が施設でくらせるようにする 90 (17.3) わからない 179 (34.4)
- ④ 親といっしょにくらせるようにする 328 (63.1) わからない 136 (26.2)
- ⑤ 障害児のための学校へ行かせる 240 (46.2) わからない 175 (33.7)
- ⑥ 普通の小・中学校へ行かせる 90 (17.3) わからない 240 (46.2)

17. 障害のあるお子さんを育てている母親に対して

- ① 子育ては、その母親の務めだと思う 319名 (61.3%) わからない 99 (19.0)
- ② その母親の手伝いをする 239 (46.0) わからない 180 (34.6)
- ③ 他人は干渉しないほうがいいと思う 58 (11.2) わからない 181 (34.8)
- ④ 自分とは無関係なことだと思う 23 (4.4) わからない 102 (19.6)
- ⑤ その母親も自分らしい生活をすべきだと思う 372 (71.5) わからない 94 (18.1)
- ⑥ 周囲の協力より、社会の問題だと思う 141 (27.1) わからない 221 (42.5)

## 18. 子どもが仕事を選ぶときに、親に相談したら

- ① 障害児の学校の先生になるのに賛成する 387名 (74.4%) わからない 110 (21.2)
- ② 障害者施設で仕事するのに賛成する 391 (75.2) わからない 105 (20.2)
- ③ 障害者を治療する医者になるのに賛成する 393 (75.6) わからない 88 (16.9)
- ④ 障害者を訓練する仕事につくのに賛成する 406 (78.1) わからない 97 (18.7)
- ⑤ 障害者を多く雇用している職場で働くのに賛成する 362 (69.6) わからない 123 (23.7)

## 3. 結果と考察

1) 数量的分析から見た障害者に対する意識  
数量的分析と考察に必要な資料は、表1に示す。

## ① 加工された障害者像

障害者の代名詞のごとく称されるヘレン・ケラーを親世代はよく知っており、伝記、映画やテレビで80%近くが情報を入手している。同情を半数以上が示すものの、感銘を受ける方が圧倒的に多い。野口英世についても同様の傾向が見られる。最近ではテレビや出版物などでいわゆる「障害者ものが」流行し、視聴者や読者を引きつけている。ヘレン・ケラーや野口英世は、その古典的存在とも言えるが、作成者の手を経由した間接的な障害者との接触が、一般社会に与える影響について考慮する必要がある。

親から子どもへの伝承の程度であるが、ヘレン・ケラーも野口英世も親の半数以上が何らかの形で子どもへ伝えている。その際に、加工されたイメージに、さらに親の考えや感情も折り込んで子どもに話し、読み聞かせをしているはずである。

## ② 障害者であることの認識

## &lt;どこかで見かける障害者&gt;

親自身の障害者の認識についてであるが、頻度は、障害別では、知的障害者92.9%、視覚障害者91.3%、肢体不自由者90.6%といずれも90%を越える。聴覚障害者のみが66.0%にとどまるが、障害が見えにくいからだろう。親世代の10%も障害者が認識外の生活をしているという見方もできる。

町で見かけるといのは、肢体不自由者90.6%、視覚障害者90.2%、知的障害者89.0

%といずれも90%程度であるが、聴覚障害者は48.5%と半数になる。公共の乗り物で見かけるは、率が高い順に知的障害者82.9%、視覚障害者73.7%、肢体不自由者69.2%、聴覚障害者53.7%である。

## &lt;障害者関係の学校や施設の訪問&gt;

経験者は盲学校8.1%、聾学校5.6%、肢体不自由教育養護学校14.8%、精神薄弱教育養護学校13.3%である。施設に関しては、視覚障害者4.6%、聴覚障害者3.8%、肢体不自由者22.5%、知的障害者19.8%で、肢体不自由者と知的障害者の施設が全体の1/5と高いが、この地域が障害者との交流に力を入れているからで、一般的な傾向とはいえない。

## &lt;知人としての障害者&gt;

視覚障害者12.1%、聴覚障害者23.3%、肢体不自由者27.1%、知的障害者29.0%である。視覚障害者以外は、親の4人に1人は直接的に関わりのある障害者がいる。肢体不自由者や知的障害者に関しては交流教育の効果であると推測できる。親に身近に障害者がいるということは、その子ども世代にも現実的な波及効果が期待できる。

## ③ 障害者に対する気持ち

実際に障害者と接触のある人も、ない人も含めた結果である。同情という言葉に集約される気持ちは、全体の3/4に示された。知的障害者に対しては同情は他の障害者に比較すると低く、68.1%にとどまっているが、それでも半数をはるかに越えている。

障害者は暮らしにくいと考えるかであるが、80%以上の人々が障害の種類を問わず、そのとおりであるという回答をしている。しかし障害者が特別の人だと思ふ人は少なく、視覚障害者15.6%、聴覚障害者13.8%、肢体不自由

者17.3%，知的障害者22.7%となっているが、知的障害者が特別の人だと思うという人の率が相対的に高い。

親として子どもの学級での障害児の統合教育に対する考えを見てみる。賛成は、視覚障害者57.3%，聴覚障害者55.6%，肢体不自由者66.3%，知的障害者48.3%である。先進国の多くが、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由者の統合教育（部分的統合教育を含む）を実践している現状からすれば、身体的な障害ですら、統合教育賛成派が半数をわずかに上回るだけであるという結果は、わが国の統合教育の具体的な推進のための方策が鈍化している傾向を反映しているといえる。判断を保留する親が30%前後いるのは、統合教育に賛成したい気持ちと、現実的な困難さの認識の板ばさみの表現だろう。

#### ④ 障害者とのふれあい

##### ＜障害者の介助への意思＞

障害者への対処の仕方を見てみよう。目の不自由な人が迷子になっていたら、86.7%の人は「どうしましたか」と声をかけ、車椅子の人が階段の下で動けない時にも90.0%がそうするという。周囲に援助のために知らせる人も70%前後いることがわかる。両障害とも、自分は何もできないと思う人は7%ほどにとどまり、自分とは関係ないと思う人は2%のみである。介助方法を知っておきたいという人は80%ほどに達している。

実際に行動に移せるか否かは、次のステップの課題である。

##### ＜身近な障害者＞

障害者との接触経験の全体的傾向を把握しておく。知人に障害者がいるのは46.5%で約2人に1人の割合で、比較的身近な存在である。親戚に障害者がいるのは23.3%で4人に1人の割合、自分に障害の子がいるのは520人中12人で2.3%である。

次に、子どもと障害児との交流についてであるが、子どもの障害児学校の訪問を知っているのは17.7%で、わからないのが23.3%である。子どもの学校へ障害児が来たというの

は24.2%，わからないのは26.5%である。子どもの障害者施設の訪問を知っているのは33.3%，わからない5.8%である。子どもが何らかの形で障害児・者との交流がなされていると親が認識しているのは、20～30%の範囲である。

##### ＜ボランティア活動＞

ボランティアという言葉を知ったことのある人は87.5%である。このアンケートへの回答は、協力可能な人に限られたことを考えれば、一般的には親世代へのこの言葉の浸透はさらに低いと考えられる。

実際にボランティアの経験者は回答者のうちの27.5%で4人に1人である。ボランティアをしたい人は39.0%で経験者を上回る。家族でボランティアをしている人がいるのは42人で8.1%である。子どもがボランティアをしたいと言ったら81.0%の人が賛成すると答えている。

ボランティアに対するイメージであるが、誰にでもできると思う人は59.2%で、人のためになる88.5%であるが、賞賛されてもいい64.6%である。楽しいと思う人は低く29.2%で、手伝いと同意義だと思っても29.4%である。ボランティアより仕事を選ぶのは27.9%、ボランティアより趣味を選ぶ人は14.2%である。

#### ⑤ 障害児とその親への意識

##### ＜仮定「障害児の親ならば」＞

障害のある子が生まれたと仮定し、親としていかなる感情を抱くかであるが、9割以上の91.3%が悲しむと回答している。子どもの誕生という喜びは、子どもに障害があった場合には悲しい気持ちに180度転換するという数字的な表現である。

障害の子どもを兄弟姉妹の中で一番可愛がるというのは30%であるが、わからないという人も42.5%もいて、障害の子どもへの接し方には躊躇する感情がある。障害児の親になった場合には、この結果のようにふるまうわけではないが、障害児に対する親世代の表現であると考えられる。

障害児を施設に入所させるか親許におくか  
とであるが、施設で暮らせるようにするとい  
う考えは少なく17.3%（わからない人は34.4  
%）である。親と一緒に暮らせるようにする  
というのは多く63.1%で、わからない26.2%  
を合わせると9割ほどに達し、子どものうち  
は親が育てるとい考えが主流をなしている。

障害のある子の教育に対する考え方を見て  
みよう。障害児教育専門の学校を選択するとい  
う人が46.2%（わからない33.7%）で半数  
には満たないが、しかし普通の小中学校を選  
択するという人17.3%（わからない46.2%）  
を大幅に上回る。

特殊教育諸学校にしても普通小中学校にし  
ても「わからない」という率も高く、とくに  
普通小中学校では「わからない」という人が  
半数近くになっている。障害児の教育と関わり  
がないあるいは薄い人にとって、障害児の  
教育について具体的に考えるのは難しく、仮  
にわが子が障害児だと仮定したらという前提  
があるだけに、判断に迷うところであろう。

#### <障害児のいる母親への共感>

実際に障害児を育てる母親に対する、一般  
の小中学生をもつ親の気持ちであるが、子育て  
は母親の務めである61.3%、障害児の母親  
も自分らしい生活をすべきである71.5%とい

う結果である。障害児のいる母親は、障害児  
の母親として子育てをし、しかも自分らしい  
生活をするという二重の期待を寄せられてい  
る。

障害児のいる母親へのサポートであるが、  
その母親の手伝いをしてほしいという人は46.  
0%で半数は協力的である。周囲の協力より  
は社会の問題だと考えるのは27.1%、干渉し  
ない方がいい11.2%、自分とは無関係4.4%  
という結果になっている。

#### ⑥ 障害者関係の仕事への意識

自分の子どもが仕事を選ぶ場合に、親とし  
ての態度を見てみる。障害者関係の仕事に子  
どもが就きたいと望めば、3/4の親は賛成  
するという結果になっている。障害児教育の  
先生74.4%、障害児施設の職員75.5%、障害  
者を治療する医者（整形外科医やリハビリテー  
ション医）75.6%、障害者を訓練する仕事  
（理学療法士や作業療法士）78.1%という結  
果である。いずれも約20%ほどがわからない  
と答えているし、大半の親は子どもが障害者  
関係の教育、福祉、医療の仕事に就くことを  
反対はしないだろう。

障害者多数雇用企業などへの就職を子ども  
が希望した場合は賛成する率がいくぶん下が  
り、69.6%になっている。

表2 A1制度・社会

30代
☆ 福祉制度の充実とそのための教育
☆ 社会全体でケアすべき
※ 外国での状況に比較し、日本は遅れている。社会が障害者の自立を助ける
□ 労働に対して、国や県は賃金を保障してほしい
☆ 差別のない社会をつくる
○ 障害者が安心して相談できる施設や手伝う人が近くにいるようにする
□ 能力にあった職業が与えられる
○ 周囲の協力と施設をよくすること
○ 障害者が安心して暮らせる社会を造り、施設を増やす
40代前半
☆ 健常者中心の生活環境になっている。すべてが普通に暮らせる国作りが大切
○ 福祉施設の充実
○ 国が福祉を充実させ、障害者の介助にヘルパーを派遣する
○ 国で施設や学校を充実させ、自立への道を開いてあげる

親世代の障害者に対する意識

- 国全体がもっと福祉にお金を使ってよい（施設、訪問入浴、紙おむつ）
  - ☆ 社会の問題として取り上げ、設備を充実させ、手助けについては教育を広める
  - 相談窓口を設置し、医療やその他の施設を障害者に開放する
  - 障害者を世話する人の人数を増やし、高い賃金を払う、社会制度の整備
  - ☆ 社会環境をつくる
  - 身内だけで必死にやるのではなく、公的機関、地域の理解で支える
  - 障害者施設を増やし、公共施設を使いやすくする  
医療が受けられるような経済保障
  - よりよい生活ができる施設、働く場所を多くし、皆が平等の暮らしをする
  - 障害者のための設備、施設を充実させる  
公務員の余剰人員を障害者サポートに回す
  - 同等に働けるようにする
  - 障害児の親が相談できる場所が身近にあればいい
  - 福祉施設の充実
  - ☆ 社会が受け入れ障害者が町に出られるといい、忙しく他人に目を向けられない
  - 社会がバックアップする施設も必要
  - ☆ 障害者や老人が共存する社会をつくり、生命ある限りひとりの人間を大切に
  - ☆ 福祉の向上と個人主義的な社会の改善
  - ☆ 同情ではない、同じ人間、ハンディは協力により解決、弱者中心の社会
  - ※ アメリカでの滞在経験と、日米比較
  - ◇ 社会福祉予算の増大
  - 施設を増やす
  - 行政面での遅れをなくす
  - ◇ 福祉予算の増大
  - ☆ 国の援助
- 40代後半～50代前半
- 障害者の国営企業の創設、外国の援助よりも国内の困っている人のことを優先
- ※ 外国に比べて遅れている  
設備面での改善は必要
  - 施設や職員の充実
  - ☆ 優しく接する社会
  - ☆ 国が社会的弱者を守る
  - 障害者と家族は大変。外出の時、障害児を安心して頼める施設やケアが必要
  - ☆ 国が福祉にもっと力を入れるべき
  - 障害者雇用の拡大
  - ◇ 国の財政的な裏づけ
  - ◇ 政府が多額の援助をする
  - ◇ 国からの補助金増大、福祉職員の人数の増大
  - 福祉に力を入れ、1：1で世話人が付くほどの共同生活ができればいい
  - ☆ 周囲、国、社会が積極的に取り組む
  - 施設や職員を増やす、地域福祉と雇用拡大
  - 身近なところで、気軽に預かってくれる施設があればいい  
障害の重い人ほど福祉制度の制限がある
  - ◇ 思いやり予算を国内の職場や駅などの整備に当てるべき
  - ☆ 国も、地域も、人の協力を必要とする
  - 障害者が働ける職場の拡大

- 記号説明 ☆ 社会・国のあり方  
○ 施設・福祉サービス  
□ 労働・職業  
※ 海外との比較  
◇ 福祉予算関連

表3 A2 教育

## 30代

- ◇ 小学校での障害者との交流教育は意味がある  
福祉制度の充実とそのための教育  
学校でも、障害者本人、関係の仕事をする人の話や体験談を聞く会を開く
- 障害のある人が同じ学校で一緒に生活する
- 幼児期から障害児と一緒に生活する教育環境を義務づける
- 幼稚園や小学校の低学年から、障害児と一緒に生活し教育を受ける
- 障害者の人権を保護するには、障害児と同じ教室で思いやりを学ばせる
- 特殊学級を廃止して統合教育の教員に振り向ける
- ◇ 共に暮らし生活が楽しめるように手助けし、小中学生に交流の時間をつくる  
小さい頃から教育に取り入れ、理解を深め、仲良く協力できる教育をする  
ボランティア普及には授業に取り入れる  
自分の人生を主体的に生きる教育や思想がある
- 軽い障害者の統合教育を進めれば、普通の子どもが特別の目で見ない
- 自然と一緒に遊んだり、学べたりできればいい

## 40代前半

- ◇ 小さい時から障害者と健常者が交流を図る
- 小さい頃から一緒に過ごす時間が必要
- 小・中・高ともに障害者を受け入れる
- 統合教育を進め、障害者は勇気を、健常者は優しさをもつ
- 幼稚園、保育園から統合を進める
- ◇ 施設訪問、小学生や幼稚園段階での交流、手話を授業に取り入れる
- 子どもの頃から同じ学校に通い、互いに相手を知る  
学校の授業に手話と点字を組み入れる  
人間同士で助け合うのは当たり前、教育現場は人間性を育てる
- 統合教育は賛成であるが、障害に応じた個別指導が必要
- 障害児を受け入れる普通校を増やす  
学校内に障害児の特別クラスをつくり、障害の子と接するようにする  
小さい頃から障害者への理解を促す教育が必要  
色々な人がいて、当たり前ということを自然に認め合える教育が必要  
授業としてボランティアを体験させれば、人権のビデオや話より有効
- ◇ 学校行事として交流会を実施し、高学年ではボランティア活動を授業で実施  
子どもの頃から学校で障害者の理解を学ぶ機会を作るべき
- ◇ 幼稚園か小学校で障害者と接する機会を設け、思いやりの心を育て、助け合う社会をつくる  
生命を大切に、個人の尊重、困った時は手を貸すという教育を子どもと成人に  
障害者理解を深める教育
- 副担任を設けて統合教育を進め、障害に応じた学習も定期的に行う  
小さい頃から、障害者理解の教育をする  
小さい時から福祉と障害者理解の意識を育てる教育、社会機構の充実  
学校で、ボランティアを生活の一部として取り入れる  
高校生活の一日を車椅子で生活する体験は有効ではないか  
学校で介助や専門家の話を聞く機会を設ける、障害者が家に閉じこもらない  
小さい頃から思いやりを植えつけ、シルバーシートなど必要なくなればいい
- 障害児も普通小・中学校で行動し、平等と助け合いの心を大切にする  
ボランティア（中・高校生も）人口の増大

## 45代後半～50代前半

学校の授業で道徳に取り入れ、学級単位で活動する

- ◇ 子どもの頃から障害のある子とふれ合わせ、自然にわかるようにする  
健常児に思いやりを学校と家庭で教える
- 障害児の統合教育を進め、自然に接する人間教育が必要
- 統合教育を進め、一緒にいることが当たり前であるという実感をもてるようにする
- 学校でも共に生活するのがいい  
社会を体験させ、色々な人がいることを教育を通して教える  
学校で交流教育を進める  
車椅子で通学する体験学習、中学・高校・大学でボランティアを必須単位
- ◇ 小学校の教育に交流教育を入れる、道徳ではなく、体験を重視する  
子どもの時からボランティア教育
- 普通小・中学校で障害児が学習すれば、相手を理解し思いやる気持ちが育つ
- ◇ 障害者とふれ合う授業を組み入れ、健常者も一人では生きられない認識をもつ  
中学3年生から大学生まで、週に一日は施設にボランティアに行くようにする
- 障害児の統合教育を進めるためには、学力至上社会を改革しなければならない

記号説明 ◇ 交流教育  
○ 統合教育

## 2) 質的分析から見た障害者に対する意識

「社会的統合への考え」を探る。

### ① 質問の仕方、回答者の概要、整理方法

障害者の社会的統合への考えを聞くために、自由記述によって「障害のある人や障害のある子も、みんなが不自由のない暮らしをするためにどうしたらようでしょうか。」という問いかけをしている。

記述式の場合、考えを表明するための材料が必要で、さらに文章化するので、経験や知識に加え表現力が要求され、選択式に比較すると回答率は必然的に下がる。

回答率であるが、520人中282人(54.2%)が独自の考えを書いている。箇条書き、長い文章、一行のみなど書き方は様々である。内容も経験に基づいたもの、マスコミの影響によるものなど多岐に渡る。年齢構成別に回答率を見ても、30代前半の人のうち87.5% (8人中7人)、30代後半の人のうち42.1% (114人中48人)、40代前半の人のうち48.8% (254人中146人)、40代後半の人のうち26.0% (135人中72人)、50代前半は100% (9人全員)である。

282人の考えを年齢別にできるだけ1行にまとめ、さらにA社会のあり方(A1制度・社会、A2教育)、B人間的絆(B1気持ち・交流、B2ボランティア、B3障害者の立場)、

Cその他(C1福祉の町づくり・福祉機器、C2分類外)に分類した。結果は表2～表8に示す。

### ② 社会のあり方と障害者の社会的統合

社会のあり方については、制度や社会のあるべき姿を述べているが、その中でも教育に関するものは独立させて分類した。その理由は、小中学生をもつ親に対して学校という教育機関を通して実施しているからである。

#### <福祉社会への期待>

表2に示すように、社会・国のあり方、施設や福祉サービス、労働と職業、海外との比較、福祉予算などが含まれる。具体的には、社会の連帯責任、平等な社会の達成、偏見や差別のない社会、弱者中心の社会、障害者が安心して暮らせる社会、国の福祉の充実、社会福祉予算の増大、行政の確かな支援、海外との比較による日本の遅れ、といった事がらが指摘されている。同時に、現実への批判から憤りのような感情も行間に漂う。一方、ミクロ的な内容を見ると、障害者が安心できる施設や相談機関、医療機関の充実、職員の充実、自立への援助や雇用、賃金の確保などの他に、具体的な提言として、施設の質、ホームヘルパー、紙おむつ、ショートステイ、身近な施設の必要性、公共施設を使いやすくす

る、といった事がらが記述されている。

#### <教育への期待>

表3に示す。交流教育と統合教育に関する考えには表中に印をつけてある。教育に関しては、学校を通してのアンケート依頼であり、具体的な内容も含まれる。例えば、「統合教育には賛成であるが、障害に応じた個別指導が大切である」(41歳)、「副担任を設けて統合教育を進め、障害に応じた学習も定期的に行う」(43歳)といった書き方もされている。

教育に関するものとしては、障害児と健常者の相互理解のために、統合教育、交流教育、体験学習、ボランティア教育などが記述され、養護学校などの特殊教育諸学校に関する教育内容は全く見られなかった。他に、人権教育、手話や点字を取り入れた教育、人間性尊重の教育、思いやりの教育、平等と助け合いの心を大切にされた教育、道徳の授業に取り入れる、差別や偏見をなくす教育、といった事がらが出てきている。

表4 B1 気持ち・交流

#### 30代

- 障害のある人のことを知れば、理解や協力が自然にできる
- ☆ 他人からの手助けが必要な人が堂々と生きられるようにサポートできればいい
- 特別視しないで、接する
  - で言ってもわからない。ちょっとした気づかいだろう
- ※ 健常者と障害者がふれ合って、意見交換をする
- ☆ 障害者本人と周囲の気持ちを優先し、私たちはそれを支える手伝いをする
- ◇ 助け合う人間として、優しさと慈しみをもって、己の役割を行う
  - 何か手伝うことがあれば、自然に行うつもりでいる
- 特別視せず、自分でできることには周囲は手を貸さない
- 障害者も普通の人間としてみる。不自由な場面で、個人も社会も愛情が必要
- 障害のある人が、同じ地域で一緒に生活する
- 自然な気持ちで助け合い、協力し、共存する
  - 健康な人の考え方を考える。障害者も生きる権利がある
- 同じ人間に対し、差別的な目、行動があるのがおかしい
- 周囲の理解と協力
- 障害者だからと言って特別視するのではなく、自然に助け合う
- ◇ 不自由な人のことを思う気持ちを懸命に伝える
- ☆ アメリカのように、自然に障害者に手を貸したい
- 自分自身の問題として偏見や差別をなくし、住みよい社会をつくる意識をもつ
- ※ 身近に障害者がいないと存在さえ忘れるので、障害者との交流の場を設ける
- 社会から排除するのではなく、同情ではなく、共に生きる姿勢が大切
  - 障害者が何をしてほしいかわからない、親切の押し売りはしたくない
- ☆ 点字本づくりや車椅子の人の手伝いなど、協力する
- 助け合い励まし合う
- 特別な目で見ないで、障害は個性だと思い、応援してあげたい
  - 市民の間で、不自由のない暮らしのために問題点を出し、解決策を提起する
- 健康な人たちの協力体制

#### 40代前半

- ☆ 健康な人が不自由な人の手となり足となってあげる
- 遊んであげようではなく、一緒に遊ぼう、からスタートする
- ※ 交流を深める
- ※ 周囲の人とふれ合う機会をもつ
- 障害者と対等に接し、その障害をありのまま受け入れる
- ☆ 障害者をばかにせず、自分がそうなった場合を考え、過保護にせず助ける

- 身内だけでなく、周囲の協力が必要
- ◇ 一人一人の心がけと、社会福祉の充実
- 特別扱いをせず、社会の一員として迎え入れる
- ◇ 遠くの親戚より近くの知人、日常的に信頼関係をつくっておく  
障害者が地域に自然に溶け込む  
障害の有無にかかわらず互いに近づき、自立した人間として接する
- 自立する手助けは必要だが、同情、親切心、特別視は不要
- ☆ 町内会などで、手助けができるシステムがあればよい
- ◇ 一人一人の他人を思いやる気持ち
- ☆ 町で困っている人に声をかけて、手伝ってあげる  
その人の立場にならなければその人の生活の不自由さをなくすことはできない
- ☆ 身近な手助けからする、障害者も助けを求める
- 社会も含め、周囲の人間理解が障害者の不自由さを減らす
- 地域ぐるみの支援
- ◇ 色々な子がいて普通という状態が大切で、いたわりの気持ちを育てる
- ※ 地域に多くの施設をつくり、障害者とふれあいの体験をする
- ※ 障害者とふれ合う機会を多くし、一人一人が障害者を理解するようにする
- ◇ 自分を同じ身に置き換え、他人を思いやる気持ちを育てる  
人間として人格を認め合い、施設を充実させ、同じ生活ができるようにする
- 特別な目で見ないで、一人の人間として見てあげる  
地域に根ざし、誰にでも、すぐ、できる介護
- ※ 交流の機会と自然な助け合い
- ☆ 福祉が充実し、一人一人が無理なくお手伝いができるようにしたい
- ☆ 障害は個性で、社会や地域が自然につき合う、困っていたら自然に手を貸す
- ※ 隔離は必要なく、小さい頃からハンディある人と過ごすことが必要
- ※ 小さい時から障害の人と接し、近所の人が登録して気軽に手伝える環境が大切
- ☆ 自分に関係ない他人事とは考えない、少しずつ力を貸してあげる  
ホームステイ形式で、家族で子どもの世話をする
- ※ 両者が接する機会を増やし、互いに助ける雰囲気にする
- ☆ 特別の目で見ないように子どもの時から障害者理解を育てておく
- ◇ 思いやりの心、相談に気軽にのれるようなサークル活動があってよい
- ※ 障害のある人も一緒にいるべきで、障害者を排除した進歩はない
- ☆ 地域の中での協力、積極的に手を貸す（本人が嫌がらなければ）
- ※ 障害者であると仮定し、障害者の気持ちを考えたい  
この世に生まれたかけがえのない人間であるという前提に立った取り組み  
アメリカのように車椅子の体験学習も有効ではないか
- 差別や偏見をなくし、弱者優先の思いやりと温かい心が大切
- ※ 平等思想の徹底、PTAや自治会を通して自然な交流を望む  
障害があっても同じ人間、ジロジロ見ない、みんなが協力する
- 障害の可能性は誰にでもある、それぞれの人格を尊重し、協力する  
人間は各自が違う、思いやり押しつけは違う、公的な面と個人との区別する
- 一人一人の心がけ、協力し合うことの大切さ
- 障害者が健常者と同じ生活をするのが当たり前という意識をもつ
- ◇ 一般人の思いやりの気持ち
- ◇ すべての子どもが思いやりをもつべき  
障害のある人と自分とは変わらないという意識  
自然な気持ち
- 周囲の理解

45代後半～50代前半

## 楽しみを分かち合う経験

- 周囲の理解を促す
- 社会の構成員である障害者を特別扱いない
- 障害者と健常者の垣根を取り払う
- ☆ 普通に声をかけ、手を差し延べればいい  
近隣であれば気軽に声をかける、点字や手話を勉強し役立てる  
障害は個性であるという気持ちで、気軽に声をかける
- ◇ 一人一人の優しさが大切
- ◇ 政治や行政に関心を持つ、優しい心と悪に毅然と立ち向かう風潮をつくる  
気がいたらすぐに行動する  
障害をもっている意味を健常者が理解すれば障害者の望むことがわかる
- 地域の助け合い
- ◇ 過度の同情や干渉ではなく、いたわり、思いやり、心配りができたらいい  
障害者が外に出て自然に見られたらいい
- 個人では疲れてしまうので、地域や周りの人の協力が必要
- ◇ 身近な人の温かい思いやり  
無理せずできる範囲で接する
- ※ もっと接触する機会を子どもの頃から設ける
- ◇ 生命の尊厳、平等意識、思いやりの心が大切  
その立場だったらと真剣に考え、何が辛いかを想像すればいい
- ※ 障害児と健常児の交流の機会を設ける
- 近隣や地域の人々が協力し、情報交換をする
- 弱さや強さを特別視せず、互いに認め合う
- 誰もが障害をもつ可能性がある、助け合う心を育てる、子どもの時から実践
- 地域での協力を幼児期から学習し、体験する
- ☆ 障害程度を知ると、その人に合った手助けができる  
自分の都合だけでなく相手を考える
- ☆ 社会的個人的に暮らしやすい施設にする手助けが必要  
手話のできる人が増える、若い人と高齢者の接触がない
- ☆ できる手伝いをする
- ☆ 同情はせず、できる手伝いを無理なく続ける
- ◇ 周りの思いやりがあればいい
- 小さいことから協力する  
人間の存在価値を認識、我が子が障害になったかもしれない、その身代わり
- 不自由のない暮らしなど不可能、障害の人を特別な人と見ない

- 記号説明 ※ 交流・体験  
 ■ 共存・平等  
 ☆ 援助  
 ○ 理解・協力  
 ● 差別・偏見・特別視の是正  
 ◇ 思いやり・優しさ・心がけ

表5 B2 ボランティア

## 30代

ボランティアという言葉の先行ではなく、周囲の温かい気持ちが大切

- 中高校にボランティアの単位化
- どのような手助けやボランティアが必要かのアピールがほしい

親世代の障害者に対する意識

40代前半

- ボランティアを義務づける
- 主婦ができるボランティアをPRしてほしい
- ボランティアをしようという者に、わかりやすい説明の機会があればいい  
ボランティアは日本では難しい  
ボランティアをする人に、何かが還元されればいい
- ボランティア教育が必要
- 授業としてボランティアを体験させる
- 高学年ではボランティア活動を授業で実施  
有償ボランティアの増加  
小さいうちからボランティアを生活の一部として取り入れる  
ボランティア（中・高校生も）人口の増大
- このような手伝いが必要であると、地域に呼びかける

45代後半～50代前半

- 地域では町内会を通しボランティア活動を活発化する  
特別とかボランティアと言う言葉に引っかかる  
簡単にできるボランティアを多くつくる
- 中学・高校・大学でボランティアを必須単位  
ボランティアの増大
- ボランティアを義務づける
- 中学3年生から大学生まで、週に一日は施設にボランティアに行くようにする  
みんながボランティアの心構えをもつ

記号説明  ボランティアの義務化  
 ボランティアの啓蒙

表6 B3 障害者の立場

30代

- ☆ 手伝いが必要な場合は、外部に呼びかけてほしい  
障害者の人がもっと外に出てきて、私たちに感動を与えて下さい

40代前半

- 障害児の親は周囲の手を借りることを恐れない
- ☆ 障害者も助けを求める
- ☆ 障害者の家族のアピール  
何が不自由なのかは我々にはわからない
- ☆ 障害者が要求を伝え、解決策を、個人、近隣、地域、行政に分けて整理する
- ☆ 障害者を援助する正しい知識と理解が必要。障害者の方から声をかけてほしい  
障害者がどんだん町に出て交流をする
- ☆ 障害者の苦悩や気持ちがわからない、本人などから働きかけや啓蒙が必要  
同じ立場の人がつながりをもつ  
保護者が自信をもって障害の子を育てる
- ☆ 障害のある人が気軽に助けを求めてくれる  
発言権の拡大

40代後半～50代前半

- 障害者自ら強く生き抜く  
障害者がもっと町に出て出会いの体験を増やす
- ☆ 社会が障害者の立場で成り立っていない、障害者から声をかける
- ☆ 障害者の人が閉じこもらず、外に出てきて声をかけて下さい

- ★ 最近の障害者は同情されるのが当たり前だと思っている  
周囲の理解獲得のために障害者はどンドン町に出る  
本人が必要な制度や援助が何かを見極める

記号説明 ☆ 障害者から援助を求める

★ 障害者の立場への批判

### ③ 人間的絆と障害者の社会的統合

#### <精神性と人間的絆>

一般的な気持ちや交流に関する内容は表4に示す。多様な内容が示されたので、交流・体験・共存・平等・援助、理解・協力、差別・偏見・特別視の是正、思いやり・優しさ・心がけ、といった項目ごとに印をつけた。具体的には障害のある人のことを知る、共存する、理解や協力、気遣い、ふれあい、優しさと慈しみ、個人も社会も愛は必要、健康な人の考え方を考える、偏見や差別をなくす、排除や同情ではなく共に生きる、親切の押し売りはしない、助け合いと励まし合い、障害は個性であるという認識、障害者と対等に接する、平等思想の徹底、弱者優先、温かい心、いたわり、思いやり、心配り、一人一人の心がけ、自立した人間としてつき合う、他人事とは考えない、障害者を排除して進歩はない、障害者であると仮定する、障害の可能性は誰にでもある、障害者が健常者と同じ生活するのは当たり前、この世に生まれたかけがえのない存在であるという意識、といった表現がされている。

ふれあいを強調するものとして、地域の中で積極的に手を貸す、小さいことから協力する、自然に手伝う、自分でできることには手を貸さない、困っている人を手伝う、小さい時から楽しみを分かち合う、地域ぐるみの支援、地域に根ざしたすぐに誰にでもできる介助、隔離は必要なく小さい時からハンディのある人と過ごす、もっと接する機会を子どもの頃から設ける、障害児と健常児の交流の機会、近所の人登録して気軽に手伝う環境、両者が接する機会を増やす、気軽に相談に乗れるサークル活動、車椅子の体験学習、PT

Aや自治会を通して交流、近隣であれば気軽に声をかける、点字や手話を勉強して役立てる、障害程度を知ればその人にあった手助けができる、といった事がらが出てきている。実際の体験や経験が根底にあると推察される内容もある。

#### <ボランティア>

結果は表5に示す。大きく、ボランティアの義務化と啓蒙に分けた。内容的には、学校教育の中にボランティアを取り入れる（「中高校生にボランティアの単位化」（38歳）、「授業としてボランティアを体験」（42歳）、「中学・高校・大学でボランティアを必須単位にする」（47歳））など、本来のボランティア以上の強制を望む声も一部にあり、勇み足が目立つ。逆に、あくまでもボランティアに主体性を重視する声もあるが少数派である（「ボランティアという言葉の先行ではなく、周囲の温かい気持ちが大切」（37歳）、「ボランティアをする人に何かが還元されればいい」（41歳））。

#### <障害者の声を尊重>

当事者あるいは本人主体の福祉が大切であるのはいうまでもないが、障害者あるいは障害者の家族からのアプローチやアピールを望む声も表明されている。結果は表6に示す。相手を知るという意味で重要な要素である。手伝いが必要なら外部に呼びかけて、障害の人がもっと外に出てきて感動を与えて、障害者の親は周囲の手を借りることを恐れない、何が不自由なのかわからない、障害者が要求を伝える、障害のあることを隠さないで気軽に助けを求めて、障害者の方から声をかけて、障害者が町に出て交流をする、理解獲得のために障害者はどンドン町に出る、本人が

必要な制度や援助が何かを見極める、などと  
いった表現になっている。中には「最近の障  
害者は、同情されるのが当たり前だと思っ  
ている」(47歳)といったように、障害者に批  
判的な内容も少数ではあるが見られる。C2  
に分類外として入れたが、「障害者には手厚  
いケアがなされている。何が不自由なかわ  
からない。」(45歳)といった考えをもつ人も  
いる。これもC2に分類したが、親(53歳)  
自身が障害者であるという人が「私自身が障  
害者で、息子は自分にも他人にも優しい」と  
書いている。

#### ④ 物理的構造と障害者の社会的統合

表7に示すように、町づくりや福祉機器な  
ど物理的構造に関する内容もある。移動に関  
するものとしては、駅の構造(車椅子用エレ

ベーター、ホームの工夫など)、バス(車椅子  
が使用可能)、盲導犬などへの考えが出て  
おり、外出という点では、障害者が利用できる  
建物、公共機関、病院、トイレなどの提言  
が見られる。やはり移動や外出という点で、  
道路の整備があり、段差の解消、信号機や点  
字ブロック、スロープの設置などが書かれて  
いる。町の構造という点で、スーパーの改善  
など人や障害者を中心に据えた町づくり、障  
害者用の運転環境の整備が出ている。障害者  
の生活に関しては、障害者用住宅や福祉機器  
の開発にふれている。音の出る信号機や点字  
ブロックというわが国独特の設備を別にすれ  
ば、福祉先進国では当然となっている物理的  
構造の充実への願いがほとんど出尽くしてい  
るという感じである。

表7 C1 福祉の町づくり・福祉機器

30代	福祉に力を入れ、例えば、駅は車椅子で上げられるエレベーターを設置する 盲導犬の理解、車椅子も使えるバスの増加など障害者が外出できるようにする 障害者には誰もがなる可能性を自覚し、建物や道路に工夫をする 建物の構造の配慮も必要
40代前半	いたるところにスロープをつくる 障害者の立場で見て考え、段差をなくし、障害者が堂々と歩けるようにする 駅近くに老人、病人などのための集合住宅をつくり、周囲に学校、保育園、図書館、スーパーを配置 する都市計画をつくる 道路や公共機関の見直し、交通機関を利用しやすくする、職場の拡大 歩道の段差をなくし、車椅子の人も乗れるバスを増やす 障害者用住宅や町の構造の整備 障害者が運転する、同乗する車にはマークをつけ、駐車場も便利な場所を確保 設備や交通機関の整備 障害者が一人で外出できるように駅、道路、トイレを整備する 障害者が外に出られるようにする(道路の段差をなくす) 駐車を優先する 町の環境の整備(段差の解消と、道幅の確保、見やすい信号) 日常生活を行うには、段差の解消、スロープやエレベーター設置、スーパーの改善 建物が車椅子で出入りできるように、特に病院 道路、乗り物、スーパーの整備 道路や建物を健常者優先をやめる、学校も会社も平等にし、助け合う 生活環境、公共施設の整備、発言権の拡大、職場や職域の開拓、個の尊重 ホームにドアをつけて、電車が着いたらドアが開く工夫は視覚障害者によい
45代後半～50代前半	車椅子が使える道路の整備

福祉の町づくり  
駅やバスの整備  
点字ブロックや信号機の整備  
自由に動ける交通機関の整備、障害者雇用機会の拡大  
自立した生活ができるように、福祉機器の開発  
国全体を障害の人に合わせた施設や形態にする  
視覚障害者のための点字ブロックの増設

表8 C2 分類外(その他)

30代

障害があっても幸せ、なくても不幸な人はいる  
今の社会は会話が少な過ぎる

40代前半

前向きに、楽しく、優しい気分になれるような呼びかけが必要  
いいアイディアは思いつかない  
障害児が生まれないように、医学、科学、宗教が進歩する  
障害者が身近にはいない、どうしたら快く思ってもらえるかわからない  
中途障害者の集まりに参加し、障害があることが不幸とは思わない  
奥の深い問題である  
特別のアイディアはない  
愛に満たされた生活がなければ、障害のある人に手を差し延べる余裕は出ない  
普通の生活が幸せであることを自覚することから出発する  
病人や不具者は人間の心に優しい思いを育てるために特別の使命を負っている  
日常生活が円滑にできるような工夫をこらす  
自分が障害者になったら、どこまでやれるか疑問である  
障害児をいじめる女子のグループがいる  
同情とか特別とかという言葉は非常にとらえにくい

40代後半～50代前半

障害者には手厚いケアがなされている、何が不自由なのかわからない  
社会参加を形式ではなくしていく  
そのような人が生まれてこないようにする  
活動には資金が必要、誰でも参加できるチャリティーコンサートなどの催し  
私が身体障害者、息子は自分にも他人にも優しい

#### 4. ま と め

調査対象となった小中学生のいる親は、障害者に理解の深い親たちである。調査対象の3校中2校は、近隣の通所施設が地域に根ざし、地域の人々が協力し、小中学生にも施設が開放され、モデル的な地域にある。調査の仕方は、学校を通して調査依頼をし、家庭に子どもが持ち帰っての記入で、強制ではなく、調査に協力的、かつ調査内容に関心を抱く親が答えてくれた。

したがってこれらの結果を一般化すること

は避けなければならない。しかし障害者理解や障害者とのふれあいがある地域ですら、障害者に対する意識や障害者の社会的統合への考えが必ずしも成熟しているとは言い切れず、ましてや障害者との接触経験も乏しく、生活の中で障害者に関して考えることの少ない地域では、調査すら不可能である。

質問紙に答えてくれた小中学生の親520名(記述部分に関してはその54%)が、障害者に対していかなる意識をもっているかについて結論を述べよう。

経験の度合いであるが、書物やテレビを通

して加工された障害者像を大半の人がもっている。9割の人は日常的には色々な障害をもつ人を何処かで見かけている。調査対象者は障害者とのふれあいの機会に恵まれ、養護学校に10%以上が入りし、知的障害者や肢体不自由者の施設にも1/5が訪問している。特定できる障害者の知人をもつ人も多く、4人に1人が、聴覚障害、肢体不自由あるいは知的障害の知人がおり、身近な存在である。視覚障害者に関してはいくぶん数値が下がる。

障害者に抱く気持ちは、まずは障害者に対しては、大変だろうという気持ちが先行し(4/5)、次に同情(3/4)が続く。障害者が特別であるという人は1/5以下である。知的障害者も他の身体的な障害者と同様の傾向にあるが、しかし同情は他の障害者より低く、逆に特別であると考える人の率が上がるという特徴がある。統合教育賛成派は3/5ほどで、知的障害はこれより低い。しかし、わが子に障害があると仮定すると、教育の場に普通小中学校を選ぶ人は1/5以下になる。他人事、仮定、身内というように状況に応じて反応が異なる証明である。

親戚に障害者がいる人は1/4ほど、子どもが障害児という人は2.3%である。

視覚障害者や肢体不自由者が困っていたら9割の人が声を掛け、7割の人が周囲の人とともに援助しようという心構えをもっている。介助方法を知っておきたいという人も8割いて、積極的な人が多いことがわかる。ボランティアという言葉は定着し、経験者も1/4以上で、家族がボランティアをしている人も1割弱いる。したいという人は2/5であり、モチベーションは高い。ボランティアのイメージは、人のためというのが一番多く約9割で、賞賛される行為が7割弱、誰でもできる6割、楽しいと思うのは3割のみである。

障害児が生まれるということは悲しいという反応が9割以上である。子どもが障害児であると仮定したら、施設入所(17%)よりも親が育てる(63%)が多いが、わからないという人もおり、判断に迷う面も見られる。自分の子どもが障害児であると仮定すると、統合教育よりも分離教育を望む人が多いが、わからないと答える人の率は子育てについての回答より高く、より一層判断に困っている。子育ても教育も、確信するためのよりどころに欠けるのであろう。

実際に障害児のいる親に対して、親であるだけでなく自分を大切にしてほしいと7割の人が願うが、同時に子育ては母親の務めであると考える人も6割いる。障害児の親として務める子育てへの期待は、障害児のいる母親への見えない強要になっているはずである。

アンケートに回答したうちの半数以上から、障害者の社会的統合に関する記述式回答が得られた。回答者の半数近くの人が身近に障害をもつ知人がいることが大きく影響しているであろう。施設が地域に開かれていることが功を奏したともいえる。福祉社会への期待、教育への期待、精神性と人間的絆、ボランティア、障害者の声の尊重、物理的構造の改善など、どれをとっても現代社会に、日常生活に、福祉の町づくりに不可欠な考え方である。紙面的な制約により削除したが経験を基盤に自己の見解を細かく書いた記述も多かったことを付記しておく。障害者の社会的統合への意見を具現化するには、数多くの障壁がはだかり、何段階かのステップが必要であるが、このような考えをする親が子どもに与える影響は家庭教育への期待につながり、学校教育との連携が達成されることにより、障害者の社会的統合は現実のものとなるであろう。